



生徒の作文から「ひとの心を動かす 世界を動かす」

世界人権宣言が採択されたことを記念して、12月4日～12月10日を「人権週間」と定められています。学習指導要領には「人権尊重の理念」が明示され、学校における人権教育は、「あらゆる教育活動を通して」という視点が強調されます。つまり、教科指導のみならず学校生活のあらゆる場面で、人権における知識や、人権感覚、実践的態度を養うことが目標です。学校だより8・9月号でご紹介したとおり、今年は内閣府主催の全国会議「拉致問題に関する中学生サミット」に代表参加したことで貴重な学びを得ました。その経験をまとめた作文をご紹介します。参加した生徒は、「今回の経験をいかに広めるか！」啓発を担う決意をつづっています。（一部抜粋）

タイトル：「拉致は世界の問題」

拉致問題は「知っている」だけで済ませてはいけません。めぐみさんもそのご家族も拉致がなければ今もごく普通の円満な日常を過ごしていただろう。そんな日常が拉致によって遮られた。

私は八月、「拉致問題に関する中学生サミット」に参加した。そこでは拉致被害者の横田めぐみさんの弟、横田拓也さんの講義を聞くことができた。

拉致とは今から約五十年前に北朝鮮が工作員の育成のため、日本の若者を連れ去った出来事だ。北朝鮮は事実を認めたものの、帰還者は17名のうち5名。半世紀経った今も、拉致問題は解決していない。

拉致問題の解決に私たちにできることはまず、アニメ「めぐみ」を観ることだ。拓也さんはサミットで「私事として考えること」を強調された。「自分の大切な家族・友人が突然連れ去られたらどうする。」という執着心をもって観ることが重要だ。私はサミットの後、もう一度「めぐみ」を観た。全く違う見え方がした。私が最初に観たのは中学一年生の時だ。当時は傍観者のように眺めていたと思う。今は家族の辛さや苦しさが伝わってくる。拓也さんのいう「私事として」の意味が理解でき、自分の言葉で主張できるようになった。

時間とともに問題意識が薄らいでいる中、拉致問題を広める必要がある。情報通信技術を利用すれば、広く発信することだってできる。拉致被害者のご家族は高齢化が進み、めぐみさんの父、茂さんは2020年に愛娘に会えぬまま亡くなられた。だから拉致問題は時間との勝負だ。

ウクライナ侵攻やパレスチナの紛争など世界では今日も争いは絶えない。テレビをつけたら争いの報道が流れるのが日常だ。しかし、拉致問題のことも忘れてはいけません。拉致問題は戦争よりもずっと長い期間、沈黙の戦いが続いている。

拓也さんの講義からは拉致被害者の「早く日本に帰りたい」という思いが自分の心に強く響いた。拉致問題は決して昔の出来事ではなく、めぐみさんたちは「家族に会いたい」という一心で今も助けを待っている。だから拉致被害者の一刻も早い帰国に向けて、世界が協力して声を上げることが救出の原動力になると思う。私はサミットに参加したものとして、拉致問題を発信していく使命があると思った。拉致問題の現状や、自分たちにできることを広く世界に発信する必要がある。一刻も早い拉致被害者の帰還に向けて、今後の活動に積極的に参加していきたい。

どこか傍観していた彼が「私事」として心が動いた瞬間、そして世界に働きかけようと作文をつづった決意が伝わります。彼の経験を学校の財産として、人権教育に生かしていきます。